五街道

No.44
第9巻第4号

発行所　東京美術
東京都千代田区神田司町2—7
電話（代表）(03)2922—3231
振替　東京3—13186
©
株式会社　東京美術　1985
定価50円

本誌「五街道」の定期購読をご希望の方は、一年間（六回分）の郵送料を含めた代金として、七百二十円を、切手または郵便振替で、東京都千代田区神田司町2—7　㈱東京美術（〒101）へご送金下さい。

巡幸日記から

児玉幸多

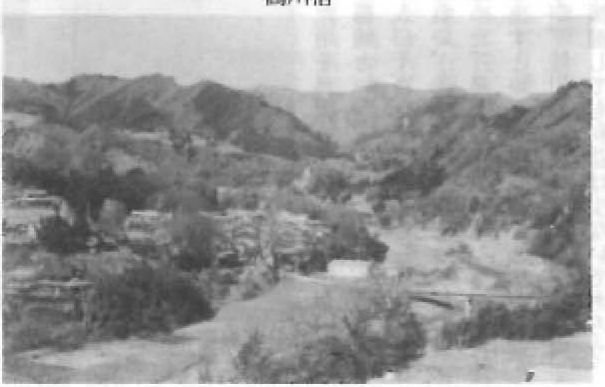
明治十三年、明治天皇は山梨・三重両県及び京都府巡幸を行われた。それは「明治天皇紀」に記述されているが、三等編修官であった久米邦武の「東海東山巡幸日記」は、沿路の史跡や物産風俗などを記して興味深いものがある。それをもとにして山梨県下の上野原から初狩までのことを少し抄録してみようと思う。

天皇の東京出発は六月十六日で、甲州街道を進んで八王子に駐留、翌十七日八王子を発して小仏峠を越えて吉野で昼餐、乙女坂の急坂を降りて、相模川の激流に臨んだ所で鮎漁を見られて五時三十分上野原の加藤家に入られた。

十八日、天皇は四時起床、七時上野原を出発。巡幸中の起床時は概ね四時から五時前後であった。上野原は人口二千六百九十九人、六百二戸、都留郡内第二の都会で、養蚕絹織を業とし、農は五分の三、商は五分の一、工はそれ以下、毎月一・六の日に市を開いた。

天皇の巡幸に当っては道路の改修が行われ、時には新道が設けられることもあったが、上野原と鶴川の間でも、鶴川の崖に新路を開き、斜めに崖下を下り、五十六間の長橋を架けて対岸の大鶴村に渡った。鶴川駅は七十五戸、三百十七人。ここから西原川の南を行き鶴坂を登ったが、甚だ急峻であった。大柳村には尾形城や長峯砦の旧跡があるが、岩村を過ぎると、近年山を削って新道を開いて、直ちに野田尻に達するようになった。旧道は山上を通っていた。当時山梨県の県令藤村

鶴川宿



紫朗は殖産興業を推進するために、道路政策は不可分のものとして、開削工事を進めていたのである。

野田尻駅（旧の宿は駅と記されている）は甲東村にあり、戸数六十、人口三百五十四。甲州人は山の蜿蜒する所をノダと呼ぶ。野田または埜と書くのがそれである。野田尻は佐野山脈の東に傾斜する所に位する。ここからその西南脈を上るのを十王坂という。路はやや急で、山側を横切る。かつて盲人が足を踏みはずして谷に落ちて死んだので座頭ころばしの名がある。今は新路を開いて崖下を行くが、なお危険がある。ここを箭壷坂といい、享禄三年に北条氏綱が都留郡に侵入した時、小山田信有が戦って敗れた所である。

座頭ころばし附近

ここから佐野山背の南に出て、山路曲折、九時四十二分犬目駅の上条盛富宅に着御。犬目駅は犬目村にあり、人口僅かに二百五十五、三十六戸。ここから佐野群山の南を下る。駅を出ると新路を開き、山角を回って山腰を上下する。ここを三谷坂という。谷を下って前山を渡った所を鳥沢坂という。桂川が前の崖下を流れ、北を鳥沢、南を藤崎という。

鳥沢駅は富浜村にあり、人口千百五十五、二百三十戸、一都会である。北に佐野群山を負い、山中に石炭がある。箭壷坂の新路開削の所にも炭層を認めた。鳥沢の字山谷という所では炭鉱を開き、年に六七万斤を出すという。炭脈がこの山を貫通していることは明らかであるが、桂川の漕路が遠いから、郡内で石炭の利用が開けなければ採掘しても利益は少ないであろう。

宮谷坂を越えて桂川に沿って行くこと数町、川幅は狭まり崖は百余尺の高さとなり、その長さ数十間にわたる。その最も狭い所に橋を架ける。長さ十七間、幅二間、橋下の水は深潭をなし盤渦して奔る。これが猿橋である。三奇橋の一である。他の二は、周防岩国の錦帯橋と越前福井の九十九橋である（今は九十九橋のかわりに越中の黒部川に架かる愛本橋を入れる）。

ここで久米邦武は猿橋の構造を述べ、猿橋の名は鎌倉時代からあることを説き、今の橋は嘉永三年に改造したもので、材がすでに腐朽して、木で支持しているとしている。そして六百年

上鳥沢宿本陣跡にある「明治天皇駐蹕地」の石碑

前にこの構造を考えたのは嘉尚すべきであるが、「ただし理学を以て論ずれば」として、この峡谷は幅が僅か百尺であるからこの橋も架せられたが、もし数百尺の幅であれば、この法は用いがたかろうといい、アーチ型の橋はすでに二百年前に始まっていることや吊橋の法などのあることを述べている。

猿橋駅は人口六百一、百二十戸。毎月三と七の日に市を開く。駅内に商戸多く、郡内中央の繁華街である。ここから天皇は馬車に移乗された。殿上・駒橋の二村より西の村々では、神酒・鏡餅あるいは赤飯を机上に備えて拝礼した。郡内（都留郡地域を甲州では郡内と呼び、甲府盆地の国中と対比する）の民は水を田圃に灌いで穀物や野菜を作る。流水は泥やごみを集めて草木を養うので、穀物や蔬菜は柔らかく味は甘美である。水かけ麦・水かけ菜と称して一郡の名産であるが、この辺で出すのが最も多いという。駒橋の西に川を隔てて岩殿山があり、小出出氏の城址である。駿河の久能、上野の吾妻とともに三険城の名がある。

猿橋

二時十三分大橋駅の溝口五左衛門宅に駐蹕。大橋駅は大月村にあり、人口二百七十九、六十九戸。商戸多く頗る繁華である。ここは甲府路と谷村路の分岐点である。谷村は郡内第一の都会で、人口三千、毎月二と六の日に市を開き、南郡の甲斐絹が集まる。嶽麓の吉田・須走を経て駿河に赴くには経過しなければならない駅である。沼津の魚商は鮮魚を担って、ここを走って甲斐に輸入する。盛夏には富士登山の人の往来が甚だ盛んである。

大橋から肩輿に移られて急坂を下ると、桂川が西の崖下を流れ、笹子川と合するところに大月橋がある。橋下の激流が岩角に触れ、笹子の水が横にこれに注ぎ、波は驚き花と散る。前の崖を東坂という。そこに井上武右衛門の絹織物工場がある。路の右に仮屋を設け、少女二十一人に各色の甲斐絹を織らせて叡覧に供した。それに金三円を賜わった。

二時五十分花咲駅の星野喜兵衛宅に駐蹕。花咲駅は上花咲村にあり、人口八百四、百五十戸、多くは織物に従事する。小さい坂を上下して下初狩・中初狩村に至る。ここは古えの波加利新庄である。駅は中初狩にある。波加利本庄と新庄とは和田義盛の邑であったが、和田合戦の時、義盛に属した古郡保忠兄弟は故郷の甲斐国坂東山波加利の東競石郷で自殺した。幕府は本庄を武田信光に、新庄を島津忠久に与えた。初狩は新庄に、初鹿野は本庄である。忠久は三子忠嗣をそこに居らせたが、子孫は宮里氏を称して鎌倉に仕えた。